

2026年10月18日 教会音楽月間④

説教題『主への畏れと賛美を真ん中に』歴代誌上 25 章 1 ～8 節

主任牧師 加藤 誠

**「ダビデと將軍たちはアサフ、ヘマン、エドトンの子らを選び分けて、奉仕の務めに就かせた。」
(歴代誌上25章1節)**

教会音楽月間の四回目。今朝は歴代誌から「礼拝と賛美」について聴いていきましょう。歴代誌は、バビロン捕囚からエルサレムに帰還した人々によって書かれた書物です。かつて美しさを誇った都エルサレムの神殿は破壊されたまま、人びとの住まいも荒れ果てたまま放置されていました。帰還民の多くが自分の暮らしの再建を優先しようとする中で、「いや、まず神殿を再建し、礼拝を確立することから祖国再建を始めよう」と立ち上がった人々がいました。彼らは、かつてダビデが最初に神殿建築を準備した時のスピリットを国の再建の礎にしようと考えて歴代誌をまとめたのです。

ですから歴代誌は、ダビデに始まる南ユダ王国の歴史についてはわずかししか触れずダビデが神殿建築準備と礼拝に奉仕する人びとを組織・訓練し整えることに、どれだけ丁寧に取り組んだかに多くのページを割いています。つまり歴代誌は「歴史書」ではなく、捕囚から帰還し、荒廃した故郷でもう一度国を立て直すために立ち上がった人々にとっての、神殿建築と礼拝に関する「指南書」と言うべき書物なのです。

この歴代誌のダビデから学ぶことはなんなのでしょうか？

第一に、ダビデにとっての神殿建築は、ダビデが自らの思い上がりを悔い改め、主への畏れをあらわす業であったということです。これは歴代誌上 21 章に記されています。王となったダビデは軍隊組織を整えるために、剣を取りうる男子の数を数えようと人口調査を実施しますが、これが主なる神に厳しく罰せられます。王としての自らの権威と武力を誇ろうとする思いが中心にあるならその国は滅びる。あくまでも主なる神に従う信仰をあなたの心の中心に置け！と厳しく示されたのでした。そこでダビデは自分の罪を告白し、主のための祭壇をここに築こうと自ら代金を払って土地を求めたのがオルナンの土地であり、将来エルサレム神殿が建てられる場所だったのです。ダビデ王の名をほめたたえるための神殿建築ではない。主への畏れと賛美を真ん中にするための神殿建築であるということが、この記事には示されています。

このダビデの姿勢は、私たちに問いかけます。私たちが毎週ここでささげる礼拝の真ん中に主への畏れがあるか。自分の暮らしを成り立たせるための働きを優先して、余った時間で礼拝をささげるのではない。自分の暮らしの真ん中に、主への畏れをしつかりと据えていくための礼拝を、私たちは毎週大切にささげられているか、と。

第二に、ダビデは神殿建築というハード面に先立って、まず毎日朝夕の礼拝を担う奉仕者を整えるというソフト面に注力しました。歴代誌では軍隊組織（27 章）に優先して、22～26 章でまず礼拝に仕えるレビ人、祭司、詠唱者（奏楽者、聖歌隊）を整えて、訓練したことは注目に値します。先ほども触れたように軍隊が先ではない、礼拝が先だ。建物よりも、そこで礼拝する人々、奉仕者が大切だということです。

祭司は、人びとのささげものを祭壇でささげる仕事、レビ人は毎朝毎夕の神殿の灯を絶やさずに灯したり、礼拝を整える細々とした仕事すべて、また門衛として神殿の建物を管理する仕事もレビ人の仕事でした。それに加えてレビ人の中から詠唱者と呼ばれる奏楽者、聖歌隊を訓練し整えたのがダビデの最大の功績でしょう。それまで「礼拝＝動物や穀物の奉献」という理解に、ダビデは「賛美を豊かにささげること」を礼拝の大切な要素として加えたのです。詠唱者のリーダーとして立てられたアサフ、ヘマン、エドトンの三人の名は詩編にでています。ぜひ捜してみてください。

ダビデにとって賛美とは何だったのか？歴代誌 25 章 1 節「彼らは堅琴、琴、シンバルを奏でながら預言した」、2 節「王の指示に従って預言したアサフの指示に」、3 節「堅琴を奏でながら預言して主に感謝し、賛美をささげた父エドトンの指示で…」と、奏楽や賛美が「預言」と結び付けられていることは注目に値します。「預言」は「神の言葉」です。奏楽や賛美は人びとの心を「神の言葉」とつなげる大切な役割として理解されたということでしょう。礼拝が「犠牲を祭壇にささげるお願いごと」で終わらずに、礼拝が「主の言葉を聴き取り、私たちの心が主の御心につなげられる場となる」ために、奏楽や賛美が重要な役割を担ったのです。また 7 節「主に向かって賛美を歌うための訓練を受け」。当時は職業の自由はなく、父の仕事が子に継承されました。祭司の子は祭司に、レビ人の子はレビ人に、詠唱者の子は詠唱者になったわけですが、その継承は自動的ではなく、そこに厳しい訓練が課されたのです。礼拝という、人びとの心を神の言葉と御心につなげる奉仕には厳しい訓練が必要であり、自分の賜物を誇る場にしてはならない。ただ主に仕える信仰が求められるからです。このダビデの取り組みを考える時、大井教会の礼拝を支え導き、会衆賛美を支え導く音楽奉仕者たちの訓練の機会を、教会として大切に覚えて祈り応援していく必要を示されます。

そして第三に、ダビデの信仰、スピリットから学ぶこと。それは次世代への祈りの継承です。「お前は神殿建築に携われない」と主なる神から示されましたダビデは、息子ソロモンのために職人や建築材料の確保など、自分に可能な準備に全力で取り組みます（28～29 章）。ダビデの功績をほめたたえるための神殿建築ではなく、主なる神の御業をほめたたえるための神殿建築であるゆえに、ダビデ自身は黒子に徹するのです。建てるのは息子ソロモン。ダビデは自分の目が黒いうちに神殿の完成を見ることはできないけれど、自分の生きているうちに、自分がなしうる神殿建築の準備に全力で取り組む様子が歴代誌に描かれています。ダビデはまず神殿建築のための材料を確保し、職人を確保することに力を注ぎます。そしてダビデ自身も献金すると同時に、人びとに献金を呼び掛けています。その際目を引くのは国内の寄留民の職人に積極的に声をかけている点です（22 章）。神へのささげものである神殿建築に必要な職人ならば自国民にこだわらず、他国の人の力を借りていく。なぜならこの神殿は自国民のためだけの神殿ではなく、他国の人々が主と出会うための神殿でもあるからです。

次世代への信仰継承の「要」は、バトンを手渡す者が今日、ここで「主への畏れと賛美」を真ん中において「心を尽くして全力で」礼拝をささげていくことにある。その信仰の大切さを歴代誌のダビデは私たちに教えてくれています。